歎異抄研究会と『歎異抄入門』についての覚書
―冷戦期日本における仏教者平和運動の一断片―

Notes on Tannishō Study Group and *An Introduction to Tannishō*：A Fragment of Buddhists' Peace Movements in Cold War Japan

小美濃　彰

Abstract

Tannishō, recognized as a segment of the scriptures of Jodo Shinshu Buddhism, has been passed down through diverse historical periods and societal contexts. In which eras and societal circumstances have individuals sought Shinran's teachings as documented in *Tannishō*? With this perspective in mind, this paper will concentrate on the Tannishō Study Group, a community of individuals exploring both Buddhist and Christian ideologies, which has been active for nearly 30 years since 1960. Furthermore, the paper will discuss the book published by the group the following year, titlee as *Introduction to Tannishō: Shinran and the Contemporary World*.

Introduction to the Tannishō was crafted against the backdrop of the Cold War, characterized by heightened awareness of military conflicts and the looming threat of full-scale nuclear war. The book draws upon Shinran's teachings to conceptualize an alternative world order rooted in Eastern Buddhist thought. Within its pages, the Tannishō Study Group seems to emphasize the exploration of perspectives aimed at transcending the Cold War international order that emerged after World War II, leveraging Eastern thought, rather than presenting a strict doctrinal interpretation of *Tannishō*. The contents of the book surprise readers, given its title "*Introduction to Tannishō*," as it simultaneously introduces Shinran's teachings within a distinctive context in a way of appropriation.

Due to the author's limited expertise in Buddhist history, accurately situating the Tannishō Study Group and "*Introduction to Tannishō*" within the existing body of research on Shin Buddhism and *Tannishō* interpretation poses a formidable challenge. Nonetheless, reconstructing the context in which Tannishō Study Group was established and *Introduction to the Tannishō* was composed appears feasible. Through this research, it may be possible to shed light on a realm that has been overlooked in the gap between studies of Buddhist history and the history of social movements. The aim of this research note is to illuminate the diverse range of contributors of the intellectual movement that has gradually taken shape through religious thought, encompassing Buddhism.

Keywords

歎異抄研究会、在家仏教、サービス・シビル・インターナショナル、一粒会

Tannnishō Study Group, Lay Buddhism, Service Civil International, Ichiryū Kai, India

はじめに

『歎異抄』を読むという体験はそれぞれの読み手をつうじて、様々な思想的かつ言説的な事象を生み出した。それらを思想史的に把握しようとした成果が子安宣邦による『歎異抄の近代』(白澤社、2014年)である。『歎異抄』が宗門の内部にとどまらず外部でも読まれる書物となったことに、清沢満之を師とする暁烏敏の講話や著作が果たした役割は大きい。

親鸞と門弟との間になされた〈信〉の教えの授受そのものである『歎異抄』が、そこから近現代の日本思想史においてどのように反復されてきたのか。暁烏敏にはじまり滝沢克己をも射程に含む広角的な視野に浮かぶ「先人の読みの痕跡を辿る」ことで、子安は『歎異抄』の読みの可能性を現代の教学的外部者に改めてひらいた(1)。

『歎異抄』の教学的解釈を追求するよりも、それがどのように読まれたのかを探求することに関心を向けている点で、本稿の問題意識もそこに接している。これから取りあげようとしているのは、1960年からおよそ30年にわたって活動を続けていた仏教者たちのグループ「歎異抄研究会」による集合的な読解の成果として上梓された『歎異抄入門:親鸞と現代』(社会思想研究会出版部、1961年)である。本稿は同書およびその母体となった研究会について現時点で知り得たことの中間報告にとどまるものだが、歎異抄研究会と『歎異抄入門』が生み出された社会的文脈を朧気ながらも浮かびあがらせるように心がけた。そこには戦後日本における宗教者たちによる平和運動との密接な関係性があるように思われたからである(2)。

この『歎異抄入門』という書物は冷戦下における軍事衝突や全面核戦争への危機感に満ちている。そのなかで『歎異抄』は、東洋世界の仏教思想を基礎にして新たな世界秩序を構想すべくひらかれている。第二次世界大戦後の冷戦秩序を東洋思想によって克服するために親鸞の言葉が聞かれているのだと言っても過言ではない。それは読者の意表を突くかたちで親鸞思想を領有した『歎異抄』の特異な入門書ながら、当時においては多くの読者を獲得したのであった。

真宗学および『歎異抄』の解釈をめぐる研究蓄積のうちに歎異抄研究会や『歎異抄入門』を位置づけることは、仏教史や教学を専門としない筆者に可能な作業ではない。しかし、歎異抄研究会の発足を経て『歎異抄入門』が生み出された経緯をたどりなおすことはできる。あらかじめ述べておくと筆者の研究課題のひとつは、後述(「SCIと一粒会」)のとおり『歎異抄入門』のなかで紹介されている梶大介という社会運動家が、どのような思想的平面に立っていたのかを探ることにある(3)。それゆえ『歎異抄入門』に梶大介が現れたことの意味を考えるために、同書刊行当時における歎異抄研究会のありようを捉えることが必要になる。

とはいえ、本稿では記述の中心として梶大介に多くの紙幅をあてるのでなく、歎異抄研究会や『歎異抄入門』にかかわる事柄をできるだけ多く示すよう試みた。その内容が、宗教

---

(1)　子安宣邦『歎異抄の近代』白澤社、2014年。序章「なぜ「歎異抄の近代」なのか」において、その方法論は同『思想史家が読む論語:「学び」の復権』(岩波書店、2010年)から持続するものだと説明されている。

(2)　大谷栄一(編)『戦後日本の宗教者平和運動』ナカニシヤ出版、2021年。とくに、永岡崇「大本・人類愛善会:世界連邦運動から安保闘争へ」(pp.183-210)は大本教に主眼をおきながら宗教界における平和運動史をたどりつつ、戦後日本の宗教界と世界連邦運動との関係性を明確に示している。本稿では十分に展開できなかったが、世界連邦構想は歎異抄研究会および『歎異抄入門』においても重要な参照項となっている。

(3)　拙稿「地域をつくる実践としての保育:梶満里の保育運動とその背景」(『日本語・日本学研究』第10号、東京外国語大学国際日本研究センター、2020年、pp.1-22)、同「梶大介の1968年」(大野光明・酒井隆史・仲田教人〔編〕『1968年論』以文社、近刊)などで梶大介を取りあげてきた。しかし、いずれも歎異抄研究会との関係あるいは宗教者たちの平和運動との関係を明確に意識することができるようになる以前に執筆したものである。

者たちのあいだで形成されていた戦後日本の平和運動のネットワークに深くかかわるものと思われたためである。このことを念頭におきながら、以下の部分では第1節「『歎異抄入門:親鸞と現代』の人脈的背景」、第2節「『歎異抄入門:親鸞と現代』の内容的特質」、第3節「『歎異抄入門』と歎異抄研究会のその後」という構成をとる。これにより、戦後日本における宗教者平和運動の広い裾野にまで光を向けることができればと考えている。

1.『歎異抄入門:親鸞と現代』の人脈的背景

1-1. 歎異抄研究会と在家仏教協会

『歎異抄入門:親鸞と現代』の「あとがき」によると、同書の出版計画が持ちあがったのは1960年3月のことだとされている。歎異抄研究会の発足に関する明確な記述は見当たらないが、おそらく書籍制作の計画にともなう共同研究の場として同時期に発足したものと思われる。その背景にあった問題意識を知るためには、長いながらもここに「あとがき」の一部を引用しておくべきだろう。

> 戦争が終わってから一五年の歳月がたち、「もはや戦後ではない。」という言葉がジャーナリズムを賑わしていた頃であったが、人々の外見上豊かな生活は、この言葉を肯定するに十分なようであった。しかしその後に起こったいろいろの社会的事件が端的に示しているように、人々の精神は落ち着きを失い、本当の意味での安定さを欠いていた。そして人々が共通の精神的なつながりによって結ばれることはきわめて少なく、皆がバラバラに各自の孤独な領域にたてこもっているような感じが強かった。このような生活面の華やかさと、精神面の荒廃とのきわだった対照。
>
> 「いかに生くべきか？」の課題はこうした社会の現実に直面している私どもにとって、大きくかつ重いものであった。
>
> けっきょく「いかに生くべきか？」の課題に対する私どものささやかな、しかし真剣な追求が私どもを「歎異抄」に近づけさせたものといえるだろう。したがって私どもは、「歎異抄」を読みながら、それが単に字句の解釈に終わることは極力さけ、それを通して親鸞の思想全体、むしろその人間像全体を学び取ろうとした。そして親鸞について議論を進め、それらの言葉を現在の社会的な問題にかかわらせながら、討議を進める形をとった。また現代に生きている親鸞の思想に、中間に何の介在物もおかずじかに触れようとの態度であった。(4)

経済発展による生活水準の上昇と精神的状況の変容。『歎異抄』をとりあげた共同の討議は、一言にまとめるならば、こうした問題意識のもとで親鸞の思想を現代社会にひらくべく開始された。そのなかで模索されていたのは、信心の獲得という実存的かつ単独的な経験に向かって『歎異抄』を読むことではなく、『歎異抄』を読むという体験を現代社会でいか

(4) 歎異抄研究会『歎異抄入門:親鸞と現代』社会思想研究会出版部、1960年、p.270。

に他者との間にひらくことができるかということでもあった。それは共同研究の方式が選択されたことについての「個人色の強いといわれる宗教の面でも一つの新しい共同研究を打ち出して見ようという野心めいた気持ちがあった」(5)といった述懐によって示唆されている。

その共同的な作業は、執筆担当者から提出された草稿に研究会参加者が検討と推敲を重ねていくというかたち進められた。研究会そのものの詳細な様子を知ることはできないが、『歎異抄入門』末尾には同書執筆に向けた討議参加者の一覧が記されている。これは先にみた問題意識がどのような人物たちによって抱かれ共有されていたのかを知る重要な手がかりであり、本稿においては〔付表1〕として転載した。その内容をここで少しばかり掘り下げておきたい。

この一覧によれば、歎異抄研究会は合同酒精株式会社、日本銀行、大学(東京大学、早稲田大学)、在家仏教協会に所属する参加者から構成されていることがわかる。ちなみに当時の研究会に関する問い合わせ先は在家仏教協会内におかれていたが、そこには在家仏教協会から二橋進が参加していたことによる便宜的な措置というだけにとどまらない関係性がある。

その名称のとおり在家者を中心とする在家仏教協会は、1952年に在家仏教会として発足したのち、1954年に一般社団法人在家仏教協会へと改組された。その初代会長を務めた協和発酵工業株式会社(現在の協和キリン株式会社)元代表取締役社長の加藤辨三郎は、同会の発足以前から月刊誌『大法輪』(6)で増谷文雄や渡辺照宏といった仏教学者らによって主唱されていた在家仏教に対し、寺も僧侶も排斥するものとして共感を抱いていたわけではなかった。ゆえに、はじめは『大法輪』を中心に呼びかけられた在家仏教運動への参加を加藤は拒んでいた。それでも最終的には、仏教を説くということをめぐっては在家者と出家者との共存および協力が必要だという立場をとる加藤を受け容れるかたちで、在家仏教協会は発足したのであった(7)。

横道にそれるようではあるが、歎異抄研究会参加者の構成にも関連する加藤の足どりを、自伝『いのち尊し』(在家佛教協会、2002年)にもとづき確認しておきたい。加藤は1923年に京都帝国大学を卒業後、四方合名会社(1925年に株式会社宝酒造へ改組)に入社。1937年には戦時統制経済下で設立された宝酒造・大日本酒類醸造・合同酒精の共同経営機構である協和会に出向し、その研究部門を担う協和化学研究所で研究部長を務めている。また、協和会は購買部を法人化した日本共商株式会社(1939年に協和化学興業株式会社へ改組)を設立しており、その社長を合同酒精社長の野口喜一郎が兼任していた。

この野口について加藤自身は「仏教と“縁”をもちはじめたのは、野口社長のもとで仕事

(5) 同前、p.272。

(6) 月刊誌『大法輪』は仏教書の取扱いを中心とする出版社である大法輪閣が1934年から刊行していたもので、仏教研究者らによる在家仏教運動についての議論も盛んに展開していた。同誌は長きにわたって多くの仏教者たちによって共有された超宗派的な仏教雑誌であったが、2020年7月号を発行してから現在に至るまで休刊状態にある。

(7) 加藤辨三郎『いのち尊し:加藤辨三郎著作集』在家佛教協会、2002年、pp.96-103。

をするようになってから」だと語っている。加藤が「熱心な仏教信者」と仰ぐ野口は「会社へ、ときには自宅へ、高名なお坊さんを招いて、仏教の話を社員に聞かせられていた」という。この聞法の場を加藤は「野口教室」と呼び、そこで浄土真宗本願寺派僧侶の松原致遠にめぐりあったことが仏教に向き合うきっかけになったと回想している。加藤いわく「野口教室」は、いつまでのことかは定かでなくとも戦後も続けられていたらしい(8)。歎異抄研究会に3名の参加者を送り出した合同酒精には、それだけの仏教的な素地が存在していた。

そこから推察するに、歎異抄研究会と在家仏教協会との関係は、後者を所属先とする二橋進が前者に参加していたというだけのものではない。在家仏教協会あるいは在家仏教の運動全体のなかに歎異抄研究会がどう位置づくかは現時点で不明だが、その一部を担っていたものと考えることが妥当なのではないだろうか。また、歎異抄研究会は親鸞への深い信仰を生活に生かしていると思われる人々へのアンケート調査を実施しており、それも在家仏教協会の会員ネットワークをもとに行なわれたものではないかと考えられるが、定かではない。参考のために〔付表2〕としてアンケート回答者の氏名・年齢・肩書を一覧にした。

歎異抄研究会に結集した面々について、合同酒精については以上のような背景を把握することができたが、それ以外についてはどうだろうか。さらに検討を進めるべく、つぎに、当時は日本銀行から参加していた井上信一に焦点をあててみたい。井上はのちに宮崎銀行に移って頭取も務めた人物である。

1-2. 歎異抄研究会のキーパーソン

歎異抄研究会が発足する以前から、井上信一は在家仏教協会の月刊誌『在家仏教』への寄稿を行なうなど、同会への積極的な参加を続けていた。同誌は第5号(1954年8月号)から、仏典の言葉や先人の行状に触れることによってひらかれた様々な考えを交わす、「仏祖のことば」ならびに「先徳のあゆみ」を誌上に設けており(9)、井上は第28号(1956年7月)の「仏祖のことば」で「誓願」と題した一文を発表していた。『歎異抄』冒頭部分の「弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて」からはじまる第一条を取り上げたその文章には、親鸞によって語られた信心獲得の経験を生涯にわたって追求しようとする井上の姿勢が示されている(10)。

その一方、銀行員としての職業生活を送る井上は、経済活動と仏教思想をどのように重ね合わせることができるのかという問題意識を抱いていた。この問題をライフワークにした探究を続けた結果として、やがて井上は日本における仏教経済学の提唱者として知られるようになる。仏教経済学といえばE・F・シューマッハーが1973年に発表した*Small is Beautiful: A Study of Economics As If People Mattered*がよく知られており、もちろん井上自身もシューマッハーの議論に依拠しながら自身の仏教経済学を組み立てている。しか

(8) 同前、pp.88-96。

(9) 在家仏教協会『在家仏教』第5号、1954年8月。

(10) 井上信一「誓願」、在家仏教協会『在家仏教』第28号、1956年7月、p.8.

しながら、大乗仏教の理想にあたる「自利利他円満」を基本理念とする仏教経済学の構築は、親鸞の言葉に耳を傾けながら積みかさねた思索に根をもつ、井上固有の取り組みでもあった(11)。

駒澤大学仏教経済研究所の研究紀要『佛教経済研究』第30号(2001年5月)には、その前年に逝去した井上への追悼文集「井上信一先生を偲んで」が掲載されている。ここに収められた追悼文をみると井上は、具体的な時期やその様子こそ不明だが、日本銀行の職場において『歎異抄』を説くことのできる場をひらいていたようである。宮崎銀行在職中にも思索を続けて『歎異抄:二つの気付き』(樹心社、1989年)や『地球を救う経済学』(すずき出版、1994年)といった成果を生んでいる。その他にも井上は、1995年4月から1996年3月までの一年間にわたって、『歎異抄をよむ』という番組をNHKラジオ第二放送で担当するなど幅広い活動を展開していた(12)。

歎異抄研究会への日本銀行からの参加者が他に4名もいたということは、以上のような井上の活動と大いに関係しているものと考えられる。また、〔付表1〕ではさらに学部生・大学院生の参加も確認でき、このことに関して、のちに井上は「今では錚々たる仏教学者で当時はまだ学生あがりだった何人かをかたらって安保騒動のさ中、歎異抄の共同討議を続け、それを『歎異抄入門』(教養文庫)にまとめました」(13)と振り返っている。

その通り歎異抄研究会に加わっていた学生たちの多くは、のちに浄土真宗本願寺派の宗務総長となる石上智康や、武蔵野女子大学で教育にたずさわりながらその死を惜しまれた花山勝友をはじめ、僧侶や仏教学者としての活躍を果たしている。坂東性純も浄土真宗大谷派の僧侶でありつつ多くの著述を行ない、鈴木大拙の*Mysticism, Christian and Buddhist*の日本語版訳者の一人としても知られている(14)。中山久美子についてはその後の足跡をたどることができないのだが、早稲田大学大学院在籍中に真宗教団史研究に取り組んでいた記録が残されている(15)。

さらには佐伯真光のように高野山真言宗の僧侶となる人物も含まれていたし、当時唯一の学部生として参加していた小川修はのちに聖書神学へと進む。その研究はパウロ書簡に

---

(11) 井上が構想した仏教経済学は『地球を救う経済学:仏教からの提言』(すずき出版、1994年)という成果にまとめられている。井上が著述活動を本格的に開始したのは、尖鋭化する米ソ対立のもと朝鮮戦争をはじめとする軍事衝突がアジアにも展開された1950年代のことであった。ソ連崩壊後に上梓された『地球を救う経済学』は、社会主義陣営に対する「勝利」を謳う自由主義陣営への批判を含んでいる。

なお井上については『佛教経済研究』第30号(駒澤大学仏教経済研究所、2001年)に掲載された追悼文集「井上信一先生を偲んで」(pp.213-241)に掲載された以下の記事を参照した。武井昭「日本のシューマッハー・井上信一先生を偲んで」、安原和雄「仏教経済学の今日的意義—井上信一著『地球を救う経済学』を読んで—」、辻井清吾「井上信一様との思い出」。

(12) 辻井、同前、pp.235-241。井上は『歎異抄入門』と同時期の著書『サラリーマンとその師』(普通社、1961年)のなかで、1950年頃から「木蔭会」という同僚との読書会を日本銀行の職場にひらいていたと述べている。

(13) 井上信一『歎異抄:二つの気付き』樹心社、1989年、pp.252-258。

(14) 鈴木大拙(著)坂東性純・清水守拙(訳)『神秘主義;キリスト教と仏教』岩波書店、2004年。

(15) 「真宗教団における番頭の変遷」という研究発表要旨が『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第7号(早稲田大学大学院文学研究科、1961年12月、pp.238-239)に掲載されている。

主眼をおくものでありながら、浄土真宗の念仏者・中村久子という存在とのめぐりあいを通じてキリスト者・座古愛子を知り、浄土教とキリスト教を照らし合わせながら思索を深めるものであった(16)。

これだけの参加者を呼び寄せることができたのは、おそらく、井上が在家仏教協会や職場での活動以外に精力的な著述を行なっていたことにも関係している。単行本として井上が手がけた最初のものと思われるのは、インド初代首相ネルーの講演録を翻訳した『ネール：自由と平和への道』(社会思想研究会出版部、1952年)であり、5年後に単著となる『現代に生きる親鸞：青年の歎異抄』(実業之世界社、1957年)を上梓している。とりわけ後者は、同内容の英語版原稿を手にしたアーノルド・トインビーがイギリスでの刊行協力を申し出た書簡のほか、仏教学者の江部鴨村、おなじく仏教学者として立正大学で英文学の教鞭を取ったジョン・ブリンクリー、そして版元の野依秀市による序文を所載して世に出された注目作だった(17)。

個別宗教による真理の相対化を克服すべく現代において『歎異抄』を読みなおすという『現代に生きる親鸞』のモチーフは、歎異抄研究会による『歎異抄入門』が目標とするところにも重なるものがある。井上信一は当時の在家仏教運動における優れた組織者であると同時に活発な議論の提起者であり、歎異抄研究会においても中心的な役割を果たしていたのであろうことがうかがえる。

では、在家仏教運動とのかかわりをおそらく基盤にしながら、ここまでに見たような多彩な人材からなる歎異抄研究会は、井上信一を中心としながらどのような『歎異抄』の読みを提示したのだろうか。

2.『歎異抄入門：親鸞と現代』の内容的特質

2-1. 基本的な構成と内容

よく知られているように『歎異抄』とは、浄土真宗の宗祖である親鸞の滅後、主として関東の門弟の間に異議が生じた状況を歎いた著者が、親鸞よりうけた口伝にもとづき書きあげたものである。本文の全18ヶ条のうち前半10ヶ条は親鸞の法語を収め、後半8ヶ条では著者による悲歎と異議への反駁が記されている(18)。『歎異抄入門』で重点的に取扱われているのは前半10ヶ条であり、後半の8ヶ条については原文を転写したものが収録されている。

まず『歎異抄入門』の各章は、「上篇」とも呼ばれる前半部分の各条々をひとつずつ取りあげ、引用された原文を意訳し、その後で読者のために解釈を敷衍していくという構成になっ

(16) 小川修「十字架につけられし女：座古愛子覚書」、『ルーテル学院研究紀要：テオロギア・ディアコニア：ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校紀要』第39号、ルーテル学院大学、2006年3月、pp.21-31。小川修『パウロ書簡講義録』全10巻、リトン、2011-2022年。

(17) 井上信一『現代に生きる親鸞：青年の歎異抄』実業之世界社、1957年、pp.i-xi。

(18) 厳密には第10条にある「「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおおせそうらいき」(真宗聖典編纂委員会〔編〕『真宗聖典』東本願寺出版、1978年、p.630)までが親鸞の法語で、続く「そもそもかのご在生のむかし」(同前)以降は著者自身の言葉からなる後半部分すなわち「歎異」の序にあたると見られている。

ている。そこでは逐語的な現代語訳に照らした解釈の心がけよりも、まず意訳によって歎異抄研究会の「読み」を端的に示すという方法が際立っている。参考のために第2章「思いたつ心の起こる時」から第一条の「本文」と「意訳」を引用してみよう。表1では本文と意訳の対応箇所が分かりやすいよう便宜的に一文ずつ分割した。

表 1 :『歎異抄』本文の第 1 条と歎異抄研究会による意訳（下線は筆者による）

	本文	意訳
①	弥陀の誓願不思議にたすけまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつこころのをこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。	この宇宙に不思議にも存すると思われる大慈悲を受けいれることによってのみ人間の救済は可能なのだと納得して、この慈悲をナムアミダブツと仰ぐように心が転回したその瞬間、ただちに私どもの救済は完成するのです。
②	弥陀の本願には、老少善悪の人をえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。	この慈悲のはたらきは年や道徳を条件とせず、ただ必要なのはすなおに受けとる態度だけであります。
③	そのゆへは、罪悪深重・煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。	なぜなら仏の慈悲の本質はまさに罪深く悩み多い私のような者にこそ向けられていると思われるからです。
④	しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに。	かくてこの大慈悲をただ受けいれさえすれば他の徳目はとくに必要ありません、人間の心の純粋さにはナムアミダブツと受け入れる時以上のものはないのですから。
⑤	悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへにと、云々。	また過去の不道徳も気にすることはありません。この慈悲はこれら一切の罪とがを乗り越えてわれらに注がれているのですから。

表1に示したように、『歎異抄入門』では『歎異抄』本文が歎異抄研究会による意訳によって、次々と読みひらかれていく。そこでは逐語的かつ辞書的な釈義が補われているわけでもなく、仏教固有の概念をめぐる細かな注釈をできるかぎり退けながら、解釈を示しているようにも見える。これは例えば、下線を付した①「受けいれることによってのみ」、②「すなおに受けとる態度だけ」、③「向けられている」、④「ただ受けいれさえすれば」、⑤「われらに注がれている」といった意訳を通じ、親鸞の言葉から阿弥陀仏から衆生にかけられた慈悲の絶対性と不可逆性というニュアンスを端的に掴みだして強調する効果を生んでいる。

こうした手順をふまえて、『歎異抄入門』の本文において歎異抄研究会による意訳がパレフレーズされていく。それはひとつの到達点としての意訳にいたるまでの足跡を明かすような作業であり、たとえば慈悲の絶対性と不可逆性については、大正期に絶大な親鸞ブームを巻き起こした倉田百三が『生活と一枚の宗教』(1931年)で語っている「うしろをみる眼」が参照されている。

一時ながら社会主義に共鳴していた倉田は、病身ゆえに労働もままならぬ自分自身の病床生活は許されるのかという懊悩にとらわれた末、自分が生きているのは何らかの資格があるからということでなく、あらゆる生命が絶対的な力によって平等に背後から支えられ

いるからなのだという考えに到達している[19]。

大正期に戯曲『出家とその弟子』(1916年)を発表して社会的に親鸞思想を膾炙させた倉田百三を通じて導入される、親鸞の法語や浄土真宗に固有の語法から離れた詩的ながらも日常言語的な表現は、仏教における慈悲や我執といったキーワードをキリスト教に接合させる媒介として活用されている。「『うしろを見る目』が開け、あるいは慈愛に目ざめることのすばらしさは、釈尊が、そしておそらくキリスト教が中心課題とした我執が崩れ去るところにあると思います」[20]といった具合に、歎異抄の本文からいったん離れたところから自由に様々な思想や概念へと架橋するという動きが、本書では繰り返されていく。

また『歎異抄入門』は、親鸞の教えとキリスト教の比較自体は目新しくなくとも、『歎異抄』本文を取りあげた第2章から第11章までの各章が必ず『新約聖書』の引用で閉じられており、『新約聖書』を通じて親鸞思想を理解するための経路が意識的に設けられている。それら各章ごとに引用された『新約聖書』の記述は、歎異抄研究会が『歎異抄』と『新約聖書』をどのように重ね合わせているのかを端的に示しており、この第2章においては「ローマの信徒への手紙」3章28節から「人が義とされるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるのである」という一節が引用されている。プロテスタンティズムの信仰義認論が「ただ信心を用とすべし」という親鸞の教えに重ね合わされていることが分かる。

各章に引用されている歎異抄と新約聖書の組み合わせについての評価は、ここで論ずる紙幅をもたないだけでなく筆者のなしうることでもないが、参考のため〔付表3〕に対照表を掲載した。『歎異抄』に語られた親鸞の言葉を『新約聖書』の言葉に重ね合わせるということは、本書において中心的な課題のひとつでもあるが、そのことによって提示される『歎異抄』を読むことの意義は何か。次項では歎異抄研究会のねらいがどこにあるのかを、もう少し具体的に検討してみたい。

2-2. インドという参照点

『歎異抄入門』のごく基本的な構成と内容だけでは『歎異抄』への入門書として、さほど注目に値するものとは思われないかもしれない。ただ、本書の大きな特徴はまったく別のところにもある。それは『歎異抄入門』のなかで繰り返されるインドへの言及である。ただし、それは仏典にもとづいて原点へと回帰していくというような志向ではない。歎異抄研究会によって参照されているのはマハトマ・ガンディーをはじめナビンドラナート・タゴール、ジャワハルラール・ネルー、ビノーバ・バーベといったインド独立運動の歴史にかかわる思想家

(19) 倉田百三「生活と一枚の宗教」、『世界教養全集』第10巻、平凡社、1963年.「後ろを見る目」は「法的自然主義の生活へ」(pp.519-521)という節のなかで説かれている。風が凧を空へと押し揚げていくように「私」というものを生かす力があり、またそうに生かされているあらゆるものは「法的に善」なのだとして、生命の絶対的な肯定が導き出される。1931年の満州事変以降、このような倉田の宗教的な感性は近代天皇制に含まれる神話的非合理性へと重なっていった(百川敬仁「日本主義者・倉田百三」、鈴木貞美(編)『大正生命主義と現代』河出書房新社、1995年、pp.242-255)。

(20) 歎異抄研究会、前掲、p.34。

たちであり、仏教徒ですらない。

『歎異抄入門』のなかでインドについての言及が集中しているのは第7章「弟子ひとりももたず」である。『歎異抄』の本文に即して言えば「親鸞は弟子一人ももたずそうろう。そのゆえは、わがはからいにて、ひとに念仏をもうさせそうらわばこそ、弟子にてもそうらわめ。ひとえに弥陀の御もよおしにあずかって、念仏もうしそうろうひとを、わが弟子ともうすこと、きわめたる荒涼のことなり」(21)という一節を取りあげた部分である。念仏は阿弥陀仏の本願力によって、人間の有限性を超えた絶対他力によってもよおされる。だからこそ弟子を争うようなことはひどく荒んだことなのだという。

しかしながら、それに通ずる「みずからの優越を主張する心」や「他と張りあう気持ち」というところでいえば、同様のことが「単に昔の宗教界のことではなく、私どもの身近に日常起こり、そして平等と平和を破って」いる。歎異抄研究会はそのような自己意識の存在を意味する我執に焦点をあて、「弟子一人ももたずそうろう」という親鸞の言葉は「これら人間のあさましい我執からの絶縁」なのであり、それは優劣のような比較衡量や支配／被支配を離れた「人間としての平等」を自覚することなのだと説いている。まずはここで、その「人間としての平等」を実践し、あらゆる宗教間の協力や被差別カーストへの差別撤廃を主張した思想家としてガンジーが登場する(22)。

それだけではない。続く部分で「政治学者は、現実の政治の本質を権力であり支配することだと説いています。また政治の特色は敵と味方とにわけることだそうです」(23)と述べ、カール・シュミットの「友・敵」理論を想起させる。現実の政治経済的な利害をめぐっては、消極的にも「敵味方があるのも仕方のないこと」と述べながら、そこで必要なものは利害を争う「友・敵」の区別を超える原理なのだとする。そのうえで参照されるのが、寛容の精神を政治原理としたアショーカ王を記念する法輪を国旗にあしらったインドであり、また初代首相ネルーの掲げた非同盟主義なのである(24)。

当時におけるインドとパキスタンや中国との関係を考慮すれば楽観的にも思われるが、冷戦体制のなかでアジア・アフリカ地域の非同盟諸国にかけられた新たな国際秩序形成への期待がいかに大きいものであったかが分かる。平和十原則を宣言したバンドン会議の強いインパクトが持続する当時において、歎異抄研究会はインドをはじめとする非同盟諸国から提起される新たな世界秩序の構想実現にはたらく思想的な力を親鸞から取り出そうと模索していた。

---

(21) 真宗聖典編纂委員会、前掲、p.628。

(22) 歎異抄研究会、前掲、p.116-117。しかしながら、被差別カーストに対する差別の撤廃を主張したガンジーがカースト制度そのものが持つ意義を必ずしも否定していたわけではないことなど、その評価を単一的に下すことはできない。加藤正彦「ガンディーと被差別カーストの解放」、国際身分制研究会(編)『第3期国際身分制研究会報告書』社団法人部落解放・人権研究所、2003年。なお、同論文はインターネット上に公開されたものを参照した。https://blhrri.org/old/kenkyu/project/mibun/mibun_h/mibun_h_0006.htm(最終閲覧日:2023年9月29日)

(23) 歎異抄研究会、前掲、p.118.

(24) 同前、p.118-119。

第1章「親鸞と歎異抄」にある「現代は新しい宗教を求めている」という見出しのついた一節で、核の平和利用という論調への同調を明らかにしつつ、東洋思想を読み直す意義を以下のように説いている。

> 二つの世界が対立し、その結果として久しくばかにされ無視されてきた中間地帯アジアには米ソ両巨頭が訪れるほか、たくさんの西欧人が研究の歩をむけるようになりました。すでに埋もれていた文化とともにいくつかの東洋の古典も西欧人に研究されはじめました。ドイツのハイデッガーという実存主義の哲学者にも、スイスの深層心理学者ユングにも東洋思想がはっきりと表れていることは有名な事実です。近代の物質主義や対立主義から比較的自由であった東洋の思想が、第二のルネッサンスを呼び起こす日も案外近いかもしれません。この自由をよりよくこなした陣営が、第二の産業革命といわれる原子力とオートメーションを使いこなし、来るべき世界の指導者となるであろうことは、ルネッサンス後のヨーロッパのたどったところから想像されるでしょう。親鸞の中心思想が、自然法爾という高い自由であったことは九章に述べますが、私どもは右のような希望と誇りのもとに、アジアの古典の一つを味わい、またできるなら世界の人に紹介しようではありませんか。(25)

東洋が指導的地位に立って冷戦下の世界的かつ先鋭的な対立状況に代わる「来るべき世界」をひらいていくという展望のもと取り上げられる『歎異抄』。このような位置づけ方は「北方民族的性格も南方民族的性格も、インド的直覚力もシナ的実証心理も、みな共に具有」すると述べた鈴木大拙の日本仏教認識を思い起こさせるものでもある。仏教の精神がインドにおいて他宗教のなかにも生き続けており、「ガンディの如きは、実にこの精神を生きている一人である」と述べたのも鈴木大拙であった(26)。

だとして自然法爾を親鸞思想の中心に位置づける歎異抄研究会は、それをどのような形でインドに接続していくのだろうか。親鸞が説いた自然法爾という境地について、第9章「非行非善」では道元の『正法眼蔵』から「仏法をならふというは自己をならふなり、自己をならふといふは自己を忘るるなり、自己を忘るるは万法に証せらるるなり」という一節が引かれている。それを親鸞思想の解釈へと重ね合わせようと進みはじめる『歎異抄入門』の記述を引いておこう。

> つまり、仏法というがそれは結局自分を発見することだ、ところが本当の発見というのは自分にとらわれる気持ちを忘れることだ、それはその時その場を精いっぱい「ナムアミダブツ申されるように」生きて、自分がその仕事なり環境なりにとけこむこと、

(25) 同前、p.16-17。

(26) 鈴木大拙『日本的霊性』岩波書店、1972年、p.75。

自己を包む世界と自分と一体となった生活を営んでいくことだ、といっている[27]

禅師として道元が説いたことと絶対他力への信心を説いた親鸞が説いたこと、すなわち「自分にとらわれる気持ちを忘れる」という道元の教えと、自力を離れるという親鸞の教えは本質を共有するものとして解釈されている。ここでは親鸞と道元、あるいは他力教と自力教が重ね合わされている。『歎異抄入門』には、このように他力教と自力教の区別を相対化するような論理が、ガンディーをはじめとするインドの思想家たちに親鸞思想を結びつけるための、基本的な手立てとなっているように思われるところがある。

すでに「弟子一人ももたずそうろう」という言葉は親鸞による我執との絶縁宣言なのだという第7章の解釈に触れた。『歎異抄入門』はそのうえで我執が権力に対して発揮されることをふまえ、ジョン・アクトンの格言「権力は腐敗する。絶対的(独裁的)権力は絶対的に腐敗する」を引く。さらに、そのような絶対的な権力にもとづく政治を「権力政治」、それを斥けた政治を「道徳政治」と区分する。そこにタゴールから引かれた「政治と商業の組織すなわち別名を国家と称するものが、高尚な社会生活を犠牲にして全権をにぎるときは、人類にとって悪い時代である」という権力観が重ねられ、我執にとらわれた権力の排除が目標として掲げられる[28]。

さらにガンディーによる断食、ビノーバ・バーベによる土地の解放と分配(＝ブーダン運動)にも言及しつつ、道徳的であることは「ガンジーの断食が示すように、まず自分に克つこと」[29]だと意味づけている。信心は自力が捨てられたところで生じるのだという親鸞の教えを基礎とするこの入門書は、自力的な克己にもとづく実践へとたどり着いている。ただし、こうした行論の土台に既述したような親鸞と道元を重ね合わせた理解があることをふまえれば、決して不思議なことではない

同様に考えることが可能な箇所が続きにもある。そこでは『教行信証』(真仏土巻)で親鸞が引いた曇鸞『論註』から「願もって力を成ず、力もって願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず。力・願あい府うて畢竟じて差わず。かるがゆえに成就と曰う」[30]という一節が参照されている。これは「不虚作住持功徳」――阿弥陀仏の本願力への気付きを得たならば虚しく漏れることなく広大な功徳に満たされること――を説くものである。法蔵菩薩の立てた誓願により阿弥陀仏の不可思議な力が成り、かつ阿弥陀仏の力により誓願が就げられるという双方の一致。そこにおいて阿弥陀仏の本願力が成就しているのだという内容である。

---

(27) 歎異抄研究会、前掲、p.168。

(28) 同前、pp.120-122。タゴールの引用は1916年～1917年に日本とアメリカで行なわれた講演をもとにした「ナショナリズム」からのもの。『タゴール著作集』第8巻(第三文明社、1981年)では「国家」の箇所が「『国民』」とされており、原語nationの日本語訳としては後者が適切であろう。とはいえ「『国民』とは、全人民の私欲が組織されたものであり、最も人間味にかけ、最も精神的でないものである」(p.326)という一節をふまえれば、我執という概念に照らしてタゴールが引用されていること自体に過誤はない。

(29) 歎異抄研究会、前掲、p.122。

(30) 真宗聖典編纂委員会、前掲、p.316。

『歎異抄入門』ではこれをうけて「仏の人類救済の願いは現実の力となるべきだし、力というものは、仏の願いに裏づけされねば意味がない。その両者が正しく一致した状態である、というふうにでも解すべきでしょうか」と記している。願と力が相かなうためには「仏の願いにめざめた人々のはたらきが必要です」と続け、さらには「私どもを奥底から動かしているものは『如来より賜りたる信心』なのですから、如来の願われるところに向かって、それぞれの縁に従ってともになにごとかをなすべきだと思います」(31)という主張が提示される。ここで投げかけられているのは、我執にとらわれず、しかし何事かをなさねばならないという難題である。『歎異抄入門』におけるガンジーやタゴール、ネルー、バーベといった思想家たちは、まさにその実践者として位置づけられている。

井上信一は『歎異抄入門』に先立って上梓した『現代に生きる親鸞』のなかで、インドを盟主とするアジア・アフリカの非同盟諸国を冷戦体制下の「真空地帯」とみなし、「強大化したアメリカとソ連の国家権力を修正することは殆ど不可能に見えるが、かかる強大権力の無意義であることを、この真空地帯で実証することが、国家権力否定の方向を推進する一番の捷径である」と述べていた(32)。井上はインド独立運動のなかで形成されてきた思想の可能性を親鸞思想との接合のうえで実現していくことを課題として抱いていたように思われる。

『歎異抄入門』においてインドが重要な参照点として位置づいていることや井上信一の思想的背景については、同時代における言説のありようや人物関係を含めてさらに検討を重ねていく必要がある。それでも、同書が親鸞思想の入門書としてどこに狙いを定めているのかということは、以上によっておおむね把握することができるのではないかと考えている。これは当時の世界において宗教思想がはたすべき役割とは何かを記した、歎異抄研究会による宣言文なのでもあった。

2-3. 一粒会とSCI

ここで『歎異抄入門』の内容について付けくわえておくべきことは、最後の第11章「無義をもて義とす」のなかで「私どもと縁の深い実践活動」として「一粒(いちりゅう)会というバタヤさんの『新しい村』」が紹介されていることであろう(33)。一粒会とは、梶大介および梶満里子という2人が中心となって東京都調布市で共同仕切場や保育所を運営していたバタヤの協同組合だが(34)、ここで言われるほどの縁の深さがなぜ歎異抄研究会との間にあった

(31) 歎異抄研究会、前掲、pp.123-124。

(32) 井上信一、前掲、1957年、p.13。

(33) 歎異抄研究会、前掲p.211。

(34) バタヤとは紙類や金属類の「ゴミ」を再生資源として拾い歩く「屑拾い」を生業とする労働者のことだが、その多くは仕切屋と呼ばれる資源回収業者の従属下にあった。バタヤについては星野朗・野中乾『バタヤ社会の研究』(蒼海出版、1973年)が、その生活と労働のありようを知る良い手引書となっている。また一粒会は、松居桃楼や北原怜子といった人物とともに良く知られている「蟻の街」と合わせて、秋山健二郎・森秀人・山下竹史(編)『現代日本の底辺　第1巻　最下層の人びと』(三一書房、1960年)でも紹介されている。

のか。その詳細は未だつかみきれていないところだが、ここでは断片的ながらも両者の関係性に近接する手がかりを挙げておきたい。

1960年7月29日付の『読売新聞』に日印親善にかかわるひとつの記事が掲載された。そこに記されているのは、既述のビノーバ・バーベが一粒会をインドに招待したということであり、それを受けた一粒会からは石橋清司と白井彰の2名がインドに渡航予定だと伝えられている。この記事には、1958年9月～12月に梶大介たちが東京から西日本を中心にかけての行脚で各地のバタヤと交流を行なったことに触れ、それが「海外に紹介され、とくにインドで大きな反響をよんだ」(35)とも書かれている。それがどのように海外へと伝わりインドで受容されたのかということを知るだけの手がかりはまだない。しかしながら、歎異抄研究会ないしその参加者が、インドとの接点をもちながら一粒会の活動について知ることのできたネットワークのなかにいたことは、ここから推測することができる。

一粒会に関連して視線を他に移してみると、同会が1961年1月から伊豆諸島の・新島において、防衛庁のミサイル試射上建設反対闘争による島民の分断にとり残されていく子どもたちのため、保育所づくりに取り組んでいたことが分かる。その活動にかかわる主要な記録を残した梶満里子によれば、新島での保育所づくりは梶大介が関係を通して一粒会との関係を有していたSCI(Service Civil International、国際市民奉仕団)日本支部との協力で進められた(36)。当時刊行されていた雑誌『新週刊』は、新島で活動するSCIの様子を取材して「『S・C・I』の旗印は、国境をこえ、むくわれることなく、ただひたすら世界の平和建設に労力奉仕をすることだ」と紹介している(37)。

『歎異抄入門』には一粒会だけでなくSCIの活動についても触れている箇所がある。第8章「無礙の一道」において、ガンジーが軍隊に代えるべく提唱したシャンティー・セーナー(平和部隊)を参照しながら「平和というものは、内に充実した道義的精神、内なる平和があってはじめて可能」(38)と述べた箇所に脚注を付し、以下のとおりSCIに言及している。

> このような考えはスイスのピエール・セレゾール(1875－1945)によってはじめられた運動、SCI(サービス・シビル・インターナショナル)によくあらわれている。それは平和を言葉によってでなく、奉仕的建設な労働と、そこでの相互理解とによって築こうとする国際的運動で、第一次大戦後ベルダンの再建作業に出発し、いまではユネスコの一組織として広く活動しており、わが国にもその支部ができた(39)。

引用でも触れられていることではあるが、SCIはスイスのピエール・セレゾールが良心的

(35) 「“貧民解放”の運動に:バタヤさん二人、インドへ親善の旅」、『読売新聞』1960年7月29日、東京、夕刊、p.6。
(36) 梶満里子『愛の砂に花ひらく』第二書房、1964年。
(37) 「ミサイルの島の“平和の楽園”」、『新週刊』第2巻第14号、新週刊社、1962年4月5日、pp.94-95。
(38) 歎異抄研究会、前掲、p.138。
(39) 同前、p.150。

兵役拒否者に対する処罰にかわる奉仕活動を提唱したことにはじまり、1920年に設立された。その活動は第一次世界大戦により荒廃したヨーロッパの再建作業にあたるワークキャンプを基礎としていた。このピエール・セレゾールはダニエル・アネットによる評伝の翻訳書『スイスの良心　ピエール・セレゾール』(アポロン社、1981年)を通じて日本にも紹介されており、高良とみがその翻訳をつとめていた[40]。

1962年3月に発行されたSCI日本支部の『SCI通信誌』によると、日本にSCI運動が導入されたのは、当時参議院議員だった高良が1950年に訪欧した際に運動を知ったことがきっかけとされている。その後、高良はSCIから依頼されたワークキャンプ参加者の推薦を務め、日本から国外のワークキャンプへの参加が開始された。日本国内においてはインドでの活動を経験した佐藤博厚が1958年に帰国してからのことで、日本で初めて実施されたワークキャンプの場所が、ミサイル試射場をめぐる闘争下にあった新島なのであった[41]。

さらに、同じく『通信誌』によると、1962年1月27日に開かれたSCI日本支部の総会で承認された名誉会員４名のなかに井上信一が含まれている[42]。歎異抄研究会に参加していた井上信一は、自身が翻訳をおこなった『ネール：自由と平和への道』に寄せた序文で、刊行のために翻訳権を得ることができたのは高良とみのおかげであったという謝辞を記しており、高良とみとの交流関係の存在が示されている。これをふまえ、SCI日本支部の名誉会員として承認されている井上信一と同一人物であるとみて、間違いないものと考えられる[43]。

ここに挙げた諸事実はそれぞれ断片にとどまるものだが、冷戦体制に代わる新たな国際秩序に向けた実践を親鸞思想にもとづき構想するという歎異抄研究会のプロジェクトに、なぜ一粒会というバタヤの協同組合が浮上しているのかを、その経緯の一端に触れているのではないかと思われる。一粒会および梶大介に関する諸資料においてインドが参照項として現われることの意味が不明瞭であったことを鑑みても[44]、この点にかかわる調査をさらに進めていく必要がある。

一粒会やSCIのような実践的な活動の紹介は、『歎異抄入門』において歎異抄研究会が目標とする実践のひとつとして位置づいている。そのような実践を社会に広げていくことが、冷戦下に構想された新たな世界の実現に向かう道と考えられていたとして、その実践が時代の文脈からまったく自由に展開していたわけでは決してない。そこにどのような可能性と限界があったのかを、社会運動史の文脈に照らして検討していかなければならないこと

(40) 高良とみの生涯と著作の詳細については、『高良とみのの生と著作』全8巻(ドメス出版、2002年)で知ることができる。高良とみについては、一粒会およびSCIの活動をめぐって予定している別稿において論じたい。

(41) サービス・シビル・インターナショナル日本本部『S・C・I通信誌』1962年3月1日号、pp.2-3。

(42) 同上、p.6。他には木下徹、馬場ゑよ、前田八郎が挙げられている。

(43) ジャワハルラール・ネルー(著)井上信一(訳)『ネルー：自由と平和への道』社会思想研究会出版部、1952年、p.4。

(44) これは梶大介という人物の評価が、東京・山谷における寄せ場労働運動の内部、あるいはそれより広い視野をとっても浄土真宗との関係を念頭においたところにとどまってきたことの要因であるように思われる。梶大介自身の著作でも明確に示されていることではないが、その思想と活動が位置していた平面は戦後日本社会における世界連邦運動に密接に重なり合っていたはずである。。

は言うまでもない[45]。

3.『歎異抄入門』と歎異抄研究会のその後

以上、『歎異抄入門』その基本的な構成といくつかの内容的特徴を論じてきた。最後に付け加えておきたいことは、この書物が1961年の初版刊行後にどのような反響を生み、歎異抄研究会がその後どのような展開を遂げていったのかということである。

『歎異抄入門』は1961年11月に刊行され、その発行主体である社会思想研究会出版部は1962年に社会思想社へと改称し、その社名は本書を収録した「現代教養文庫」の版元としても知られている。本書は増刷を経ながら1968年には英語版が、1995年には新版刊が刊行されるなど少なからぬ読者を獲得していたことがうかがわれる[46]。版元の社会思想社は2002年に事業の停止に至るが、本書を含む現代教養文庫はインタープレイブックスと文元社の協働によりオンデマンドおよび電子書籍での出版が継続されている。

1995年に刊行された新版には「歎異抄研究会―その後の動き―」が加えられており、これによって初版の反響や研究会の展開をいくらか知ることができる[47]。まず1963年には、本書が宗教をめぐる優れた解説書であるとして、中外日報社の真渓涙骨を記念する「涙骨文化賞」を受けている。その後は、井上靖と臼井吉見が編集を手がけて主婦の友社から1968年に刊行されたシリーズ「10冊の本」(全10巻)の第5巻『生死をこえるもの』(1968年12月)に、第1章「親鸞と歎異抄」・第4章「善人なおもて往生をとぐ」・第8章「無礙の一道」・第10章「念仏申し候えども」の主要部分が収められている。

また既述のとおり、1968年には本書の英語版が北星堂出版から刊行された。この英訳作業は、日本国内におけるSCI運動史において重要な役割を果たした佐藤博厚と配偶者のフィリスによって共同で着手され、のちに九州大学の多久和新爾・井田好治・橋口保夫・藤田実ら英文学グループに引き継がれて完成したようである。訳者を代表した多久和は「訳者あとがき」(Translator's Postscript)のなかで、講談社から刊行されていた月刊誌『現代』において『歎異抄入門』が人格修養の書として若手実業家に推薦されたことにも触れている[48]。

ちなみに、英語版の帯に推薦文を寄せた花山信勝は日本語で、本書が「仏教の内容・術語の難解さと、それに伴う英訳の困難さ」を解きほぐし「日本仏教の神髄たる親鸞の思想を、西欧の人々に紹介し得る人物を養成する意味で、極めて有意義である」と述べている。日本

(45) 注2に挙げた文献は、このような意味で宗教者たちの活動を戦後日本の社会運動史研究に接合させた試みとして、きわめて重要な意義を有している。

(46) どこまで増刷が重ねられたのかは不明だが、筆者は1962年2月28日時点の初版3刷を参照している。なお、初版の内容はほとんど英語版と新版に引き継がれているが、梶大介が一粒会として東京都調布での活動を続けていたのは1963年までのことであり、それ以降に刊行された英語版と新版のいずれにおいても、一粒会を紹介した部分は削除されている。また、新版では『入門』の討議参加者一覧から佐伯真光の名前が消えているが、その理由については不明である。

(47) 歎異抄研究会『新版　歎異抄入門:親鸞と現代』社会思想社、1995年、pp.252-258。

(48) Tannishō Kenkyūkai. *Perfect Freedom in Buddhism*, tr. Shinji Takuwa, Yoshiharu Ida, Yasuo Hashiguchi and Minoru Fujita, Tokyo: Hokuseido Press, 1968, p.174.

語で帯文が書かれたということからして、英語版が日本語圏での流通を念頭に置いて刊行されていたのか、その意図や実際の流通に関する詳細は不明である。

この英語版には*Perfect Freedom in Buddhism*というタイトルが与えられ、序文には最晩年の鈴木大拙が“On the Tannnishō”を寄せている。そこには「真宗信者は固有の語を用いているが、私が見ているかぎりの全宗教は浄土真宗の核心をなす弥陀の本願力という思想に収斂していくものである。われわれが持ちうるもの、それは信である」(49)といった旨の一節がある。『教行信証』を英訳するなかで弥陀の本願力を「絶対的な祈り的意志」(the absolute prayerful will)と、キリスト教における神から人間への愛＝アガペーにもなぞらえて理解していた鈴木大拙にとっても(50)、弥陀の本願力に向けられる信心の構造は決して浄土真宗だけのものでなかった。それゆえ鈴木大拙は「人間が様々な場所で、類似した事柄を異なる用語でどう説いているのか」を、キリスト教徒がこの英語版『歎異抄入門』から読み取っていけるのではないかとの望みを寄せている(51)。

刊行後に『歎異抄入門』がたどった歩みは概略以上のようなところだが、歎異抄研究会は冒頭に述べたように形を変えながらも長きにわたって活動を持続させていた。同会は初版刊行後に読者との議論および交流を期し、『歎異抄入門』に向けた共同研究参加者の野口直吉を代表とした定例研究会を新たに開始している。研究会は毎月一回を基本とし、隔月に講師を迎え、翌月は講話にもとづく会員の討論をひらくという形式をとった。その講師は在家仏教協会を中心とするネットワークのなかで招聘されていたものとも考えられるが、正確なことは判明していない。これも参考のため新版「歎異抄研究会―その後の動き―」に掲載されてた定例研究会の講師一覧を〔付表4〕として文末に転載する。

この定例会は東京を中心に行なわれた活動だが、『歎異抄入門』は初版刊行から日本国内だけでなく遠くはハワイにいたるまで歎異抄研究会への入会希望を生んだようである。涙骨文化賞を受賞した1963年時点で会員はすでに約400名、同年には「関西歎異抄研究会」と「鹿児島歎異抄研究会」が発足し、5年後には兵庫で「歎異抄友の会」が発足している。また、1962年から1971年まで機関紙『親鸞』が14号、1963年から1974年まで『歎異抄研究会会報』が計60号刊行されたという。しかし、1995年の新版刊行時には初期の会員の高齢化などにより活動が静止状態に至っており、井上信一が理事長を務めていた財団法人・仏教信仰財団における新たな展開を期待されていた。それ以降の活動状況についても、現時点では分かっていない。

『歎異抄入門』と歎異抄研究会の足跡は以上のように新版に収められた「歎異抄研究会―その後の動き―」から知ることができる。在家の仏教者たちによる活動をもとに組織された歎異抄研究会の『歎異抄入門』が決して小さからぬ反響を生み、それが在家仏教全体の動

(49) *ibid*., p.2.

(50) 田村晃徳「「意志と祈り」としての願い：鈴木大拙の本願理解」、親鸞仏教センター(編)『現代と親鸞』第48号、2023年6月、pp.216-190。

(51) Tannishō Kenkyūkai, *op. cit*, , p.4.

きにどのような影響を与えていたのか。本稿では他にも今後の研究課題をいくつか積み残しているが、在家仏教者を中心とする運動史の把握は、それらを把握するための重要な研究領域であるように思われる。歎異抄研究会が発足し『歎異抄入門』が上梓されたことの歴史的な意味については、今後も探究を続けていく必要がある。

まとめにかえて

以上、歎異抄研究会と『歎異抄入門』をめぐる①人脈的背景 ②内容的特質 ③その後の活動について、現時点における調査の成果をまとめてきた。ここでは、それらの内容をふまえたうえで、今後の研究課題を改めて整理しておきたい。

まず、はじめに歎異抄研究会のキーパーソンとして井上信一に注目したが、そこからさらに浮かびあがってきた高良とみやSCI運動との関係も、継続的な調査を進める必要がある。とりわけ本稿で十分に触れることができてない高良とみについては、歎異抄研究会にとっての重要な参照項でもあったインドが思想史的にどう位置づけられるのかを正確に捉えるためにも、研究を深めていく必要がある。欲張って言えば、アジア主義が戦前から戦後にまたがってどのような形で持続していたのか、という議論にもつながっていくはずである。

また、本稿では歎異抄研究会が『歎異抄入門』のなかで一粒会というバタヤの協働組合を取りあげていることにも注意を向けた。その中心的な人物であった梶大介は、1963年から山谷拠点を移して「山谷解放運動」に取組み、1960年代後半には中国文化大革命に共鳴して日中友好協会(正統)との関係をもって訪中も行なっている。梶大介の思想や活動の変遷過程についても、歎異抄研究会との関係のなかで『歎異抄入門』に一粒会として登場していた事実をふまえておかなければならない。絶対平和主義から毛沢東主義的な武装闘争へと、梶大介の思想はなぜ、どのような状況のなかで傾いていったのかという問題がそこにはある[(52)]。

一粒会として調布で活動していた時期から梶大介との交流関係を有していた竹中労は、山谷における運動のなかで決裂した後の1969年に梶大介について、「親鸞から右翼へ、右翼から毛沢東へと無限大に振幅する、梶の思想遍歴(？)」[(53)]と評しているが、その含意はこれまで問われることがなく、そもそも重要とも思われてこなかった。しかし、竹中労が「右翼」と呼んでいるものが具体的に何を意味しているのかという問題は、梶大介のような人物がいかなる思想と運動の文脈に位置づいていたのかの検討を必要とする。それは、歎異抄研究会と『歎異抄入門』をめぐっていくつか判明していることからも分かるように、冷戦体制

(52) この点についても、梶大介の時流に対する迎合的な態度としてのみ片付けることは適切でない。梶大介と日中友好運動との間では西川景文という日蓮宗の僧侶が重要な役割を果たしていた。戦後日本における中国人強制連行犠牲者の遺骨送還運動に参加し、日中友好協会(正統)の活動にもかかわった西川については坂井田夕起子「戦後日本宗教者の日中友好運動:仏教、キリスト教を中心に」(大谷栄一〔編〕『戦後日本の宗教者平和運動』ナカニシヤ出版、2021年、pp.247-278)を参照。梶大介と西川景文との関係については、拙稿「梶大介の1968年」(大野光明・酒井隆史・仲田教人〔編〕『1968年論』以文社、近刊)で若干の検討を試みた。

(53) 竹中労『山谷:都市反乱の原点』全国自治研修協会、1969年、p.195。

下の日本社会においてどのような主体によっていかなる世界秩序が構想され、そこにおいてアジアはどのように想起されていたのかを問い直す契機となる。

課題は未だ漠然としたところがあるが、仏教者を含む宗教者たちの平和運動の広い裾野の一部に光を向け、戦後日本社会運動史についての理解を深めることに、本稿がわずかながらも資することがあればと考えつつ、研究を継続していきたい。

小美濃　彰（おみの　あきら、OMINO Akira）
東京外国語大学大学院博士後期課程

付表

〔付表 1〕『歎異抄入門』の討議参加者一覧

氏名	所属	氏名	所属
石丸　雄造	合同酒精 KK	井上　信一	日本銀行
石上　智康	東京大学大学院印哲科修士課程	小川　修	東京大学教養学部在学
佐伯　真光	東大大学院印哲科博士課程 ハーヴァード大	坂　正夫	日本銀行
佐野　義光	合同酒精 KK	堤　孝一	日本銀行
永井　紀代	日本銀行	中山　久美子	早稲田大学大学院 文学研究科修士課程
二橋　進	在家仏教協会	野口　直吉	合同酒精 KK
日比野　佳子	日本銀行	花山　勝友	東大大学院印哲科博士課程
坂東　性純	東大大学院印哲科博士課程 オックスフォード大		

〔付表 2〕歎異抄研究会によるアンケートへの回答者（年齢は初版刊行当時）

氏名（年齢）	肩書	氏名（年齢）	肩書
今村　均（75）	元陸軍大将（ラバウル司令官）	上辻　義一（51）	住友石炭鉱業経理部長
梅原　真隆（75）	富山大学長	江部　鴨村（77）	武蔵野女子学院教授
長田　恒雄（58）	詩人、評論家	小山内　千代（59）	官吏未亡人
加藤弁三郎（61）	協和発酵社長	金子　寿美子（35）	事務員
金子　大栄（80）	大谷大学名誉教授	河村　誠（35）	屑物収集業
木下　正治（33）	日本銀行神戸支店	古賀　進（55）	住友石炭鉱業専務
佐古　純一郎（42）	文芸評論家	佐藤　春代（78）	無職
島　保（69）	最高裁判所判事	下沢　誠二（52）	職人
白石　凡（60）	朝日新聞論説顧問	多賀　重治（67）	医師
竹田　暢典（32）	高校教員	外村　繁（故人）	著述業
中島　正三郎（21）	学生	南部　勇（59）	会社役員
西　武雄（46）	在福岡刑務所	野口　時子（65）	札幌北の誉酒造監査役
橋本　龍佶（65）	農業	原　彪（66）	衆議院議員
村田　保（55）	合同酒精総務課長	山本　現雄（32）	教員

〔付表 3〕『歎異抄入門：親鸞と現代』各章のタイトルと新約聖書からの引用句

章	タイトル	新約聖書からの引用
	私たちの願い	
1	親鸞と歎異抄	
2	思い立つ心の起こるとき	人が義とされるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるのである。〔ロマ人への手紙・3 章 28〕
3	愚身が信心	神を見た者はまだひとりもいない。もし私たちが互いに愛しあうなら、神は私たちのうちにいまし、神の愛が私たちのうちにまっとうされるのである。〔ヨハネの第一の手紙・4 章 12〕
4	善人なおもて往生をとぐ	あなた方の中で罪のない者がまずこの女に石を投げつけるがよい〔ヨハネによる福音書・8 章 7〕
5	すえとおりたる大慈悲心	栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにもきかざってはいなかった。〔マタイによる福音書・6 章 29〕
6	ただ自力を捨てて	あなた方は、私が平和をこの地上にもたらすために来たと思っているのか。あなた方にいっておく。そうではない。むしろ分裂である。〔…〕父は子に、子は父に〔…〕対立するであろう。〔ルカによる福音書・12 章 51 ～ 53〕
7	弟子ひとりももたず	なぜわたくしをよき者というのか。神ひとりのほかによい者はいない。〔マルコによる福音書・10 章 18〕
8	無礙の一道	わたしは飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に処する秘訣を心得ている。わたくしを強くして下さる方によって、なにごとでもすることができる。〔ピリピ人への手紙・4 章 12 ～ 13〕
9	非行非善	あなたがたの救われたのはじつに恵みにより、信仰によるのである。それはあなた方自身から出たものではなく、神の賜物である。けっして行ないによるのではない。それはだれもが誇ることがないためなのである。〔エペソ人への手紙・2 章 8 ～ 9〕
10	念仏申し候えども	信じます。不信仰なわたしをお助け下さい〔マルコによる福音書・9 章 24〕
11	無義をもて魏とす	それは律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられた。〔マタイによる福音書・7 章 29〕
付録	巻頭の序および下篇 親鸞略年譜 アンケート	
	あとがき	

〔付表 4〕『歎異抄入門』刊行後の月例研究会に招聘された講師一覧

氏名	所属	氏名	所属
白石　凡	朝日新聞論説委員	雲道　義道	武蔵野女子大学監
江部　鴨村	武蔵野女子大教授	佐古　純一郎	評論家
小松　文雄	親和女子大教授	今村　均	元陸軍大将・ラバウル方面軍司令官
寺田　弥吉	親鸞研究家・作家	原　彪	衆議院議員
竹田　鴨典	伊勢崎高校教諭	加藤　辨三郎	協和発酵（株）会長・在家仏教協会理事長
千輪　慧	武蔵野女子大教授	堀　一郎	成蹊大教授
武田　泰淳	作家	松林　宗恵	映画監督
麻布　清澄	麻布泉明寺住職・義人党の集団更生で朝日新聞から賞を受けた	関　祐光	皆和会会長
二階堂　行邦	元・教学研究所主事	伊藤　哲雄	東京本願寺輪番
森　恭三	朝日新聞主幹	吉田　久一	日本社会事業大教授

松尾　邦之助	元読売新聞主筆・評論家・「出家とその弟子」を仏訳、ロマン・ローランの序文を得てパリで出版した	佐伯　真光	ハーバード大留学より帰朝
紀野　一義	学習院大教授・真如会主幹	原　富男	荘子研究家
末綱　恕一	統計数理研究所長	坂東　環城	浅草坂東法恩寺住職
辻　嘉一	懐石料理「辻留」主人	吉岡　奎	寂円寺住職
高山　岩男	日大教授	松野　純孝	文部省宗教専門職
唐沢富太郎	教育大教授	相渓　順忍	竜谷大名誉教授
稲垣　俊夫	浅草・通覚寺住職	三角　寛	作家
増谷　文雄	日本宗教学会会長	赤松　常子	参議院議員
早島　鏡正	東大教授	折原　脩三	思想の科学研究会会員
岩本　泰波	埼玉大教授	元柳　行志	元九州精機会長
山崎　竜明	武蔵野女子学院教諭	坂東　性純	大谷大助教授
中津　功	教学研究所東京分室主事	脇本　平也	東大助教授
武藤　義一	東大教授	真木真之介	読売新聞事業部
美濃部　薫一	美濃部学園	長田　恒雄	詩人
長谷川　耕作	光雲舎主幹	竹山　道雄	ドイツ文学者・評論家
井上　信一	宮崎銀行頭取	山本　米治	元日銀理事
玉城　康四郎	東大教授	竹内　維茂	崇信教会主幹
田丸　徳善	立教大助教授	古賀　進	住友セメント会長
近藤　章久	精神科医・近藤クリニック院長	花山　勝友	武蔵野女子大教授
菊村　紀彦	国際仏教学園教授	稲津　紀三	玉川大教授
中村　元	東大名誉教授	千谷　七郎	女子医大教授
石上　智康	千葉県・光明寺住職	平川　彰	東大教授
富岡　秀善	東京真宗同朋の会	大野　信三	明大教授

参考文献

秋山健二郎・森秀人・山下竹史(編)『現代日本の底辺　第１巻　最下層の人びと』三一書房、1960年

井上信一「誓願」、在家仏教協会『在家仏教』第28号、1956年7月、p.8

——『現代に生きる親鸞：青年の歎異抄』実業之世界社、1957年

——『サラリーマンとその師』普通社、1961年

——『歎異抄：二つの気づき』樹心社、1989年

——『地球を救う経済学：仏教からの提言』すずき出版、1994年

大谷栄一(編)『戦後日本の宗教者平和運動』ナカニシヤ出版、2021年

小川修「十字架につけられし女：座古愛子覚書」、『ルーテル学院研究紀要：テオロギア・ディアコニア：ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校紀要』第39号、ルーテル学院大学、2006年3月、pp.21-31

——『パウロ書簡講義録』全10巻、リトン、2011-2022年。

小美濃彰「地域をつくる実践としての保育：梶満里の保育運動とその背景」、『日本語・日本学研究』第10号、東京外国語大学国際日本研究センター、2020年、pp.1-22

——「梶大介の1968年」、大野光明・酒井隆史・仲田教人〔編〕『1968年論』以文社、近刊

梶満里子『愛の砂に花ひらく』第二書房、1964年
加藤辨三郎『いのち尊し：加藤辨三郎著作集』在家佛教協会、2002年
加藤正彦「ガンディーと被差別カーストの解放」、国際身分制研究会（編）『第3期国際身分制研究会報告書』社団法人部落解放・人権研究所、2003年
https://blhrri.org/old/kenkyu/project/mibun/mibun_h/mibun_h_0006.htm
（最終閲覧日：2023年9月29日）
倉田百三「生活と一枚の宗教」、『世界教養全集』第10巻、平凡社、1963年
子安宣邦『歎異抄の近代』白澤社、2014年
在家仏教協会『在家仏教』第5号、1954年9月
サービス・シビル・インターナショナル日本支部『S・C・I通信誌』1962年3月1日号
坂井田夕起子「戦後日本宗教者の日中友好運動：仏教、キリスト教を中心に」、大谷栄一（編）『戦後日本の宗教者平和運動』ナカニシヤ出版、2021年、pp.247-278
真宗聖典編纂委員会（編）『真宗聖典』東本願寺出版、1978年
ジャワハルラール・ネルー（著）井上信一（訳）『ネルー：自由と平和への道』社会思想研究会出版部、1952年
鈴木大拙（著）坂東性純・清水守拙（訳）『神秘主義：キリスト教と仏教』岩波書店、2004年
――『日本的霊性』岩波書店、1972年
武井昭「日本のシューマッハー・井上信一先生を偲んで」、『仏教経済研究』第30号、駒澤大学仏教経済研究所、2001年
竹中労『山谷：都市反乱の原点』全国自治研修協会、1969年
田村晃徳「「意志と祈り」としての願い：鈴木大拙の本願理解」、親鸞仏教センター（編）『現代と親鸞』第48号、2023年6月、pp.216-190
歎異抄研究会『歎異抄入門：親鸞と現代』社会思想研究会出版部、1960年
――『新版　歎異抄入門：親鸞と現代』社会思想社、1995年
辻井清吾「井上信一様との思い出」、『仏教経済研究』第30号、駒澤大学仏教経済研究所、2001年
永岡崇「大本・人類愛善会：世界連邦運動から安保闘争へ」、大谷栄一（編）『戦後日本の宗教者平和運動』ナカニシヤ出版、2021年、pp.123-210
中山久美子「真宗教団における番頭の変遷」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第7号、早稲田大学大学院文学研究科、1961年12月、pp.238-239
星野朗・野中乾『バタヤ社会の研究』蒼海出版、1972年
百川敬仁「日本主義者・倉田百三」、鈴木貞美（編）『大正生命主義と現代』河出書房新社、1995年、pp.242-255
安原和雄「仏教経済学の今日的意義：井上信一著『地球を救う経済学』を読んで」、『仏教経済研究』第30号、駒澤大学仏教経済研究所、2001年
ラビンドラナート・タゴール（著）山室静（編）『タゴール著作集』第8巻、第三文明社、1981年

Tannishō Kenkyūkai. *Perfect Freedom in Buddhism*, tr. Shinji Takuwa, Yoshiharu Ida, Yasuo Hashiguchi and Minoru Fujita, Tokyo: Hokuseido Press, 1968

「“貧民解放”の運動に：バタヤさん二人、インドへ親善の旅」、『読売新聞』1960年7月29日、東京夕刊、p.6

「ミサイルの島の“平和の楽園”」、『新週刊』第2巻第14号、新週刊社、1962年4月5日、pp.94-95